

## 『教育の大切さ -五十周年を迎え感じる事-』

自衛隊・防衛問題に関する世論調査（今年1月）で外国から侵略された場合は？...との問いに、「一切抵抗せず、侵略した外国の指示に服従し協力する」が回答全体の15%を示した。無抵抗なら命は保証されるという無知で幼稚な甘ったれた思考の持主達の、毎日の如く、強制収容所行きや、拷問、虐殺の人間性無視の惨事がチベット、ウイグル、北朝鮮、イスラム国等でこの瞬間にも行われているという事も思い浮かべられぬ想像力の欠落には驚かされる。憲法九条に守られ日本は平和を保たれていると信じ切っている人達に私は問いたい。

この国で拉致がまかり通り、未だに取り戻すことも出来ない日本は、平和だと言えるのか？自分だけが安全であれば、拉致被害に泣いている国民が居ても、日本は平和だと言えるのか？この国は誰がどの様にして守るのですか？.....と。同じ民族でありながら、他人の事や日本人に対し、余りにも無関心過ぎませんか.....と。

集団的自衛権限定的使用容認では、戦争法案だと真逆で無責任な虚言を弄している政治家やマスコミは、この時だけは日頃反対している自衛隊員の命を守る為の反対と訳の分からぬ主張をし、中国による危険性には無関心を決め込む。国を守る為に命を惜しまぬ隊員たちに無礼であろう。政治家やマスコミ人が国家の危機を感じていないはずがない。もし感じてないなら、政治家や報道人の資格は無い。即刻辞めることをお勧めする。害毒の種になるだけだ。



国会前でデモする左翼

嘗て「ウイントン・チャーチル」は「迫りくる危険に背を向けて、それから逃

げ出すべきではない。それをすれば危険は2倍になる。それに素早く敢然と立ち向かえば、危険は半分に減るであろう。何事に出合っても決して、決して逃げるな！！」……と。ヒトラーの要請を拒否せず妥協し続け、ヨーロッパが第二次世界大戦を招いた原因からの反省の弁である。この格言は今の日本にとって、示唆深い響きを持つように思われてならない。

かくの如き好ましからざる日本の精神衰弱の状態は何から生じているのであろうか？それはGHQによって洗脳された高学歴の人達によって各界に流された害毒である。その害毒とは「祖国と言う基本概念」が教育の場で失われ、気概や誇りが消失し、超利己的無関心を人々の心に生じさせた。結果、多くの政治家や報道関係者、各界指導者層の人達の顔が祖国という大切な基盤に向かなくなったことを指す！！それが今、外国工作員による反日思想という洗脳を許している。例を一つの学校教育に目を向けても明確になる。

校長達は生徒の自殺が起きる度に言質を取られぬよう官僚的答弁に終止し、担任は体調不良として姿を消す。評論家は学校の在り方を、鬼の首でも取った如く非難する。そして時が経てば、何事もなかった如く見て見ぬ振りをする日常に帰る。中学校の校長でもあった「次郎物語」の作者「下村湖人」先生曰く、恐るべきは「少数者の暴力」である。しかしもっと恐るべきは「多数者の無気力」であると。この無気力は前述の15%の回答に通じる。我々は前者が常に後者の無気力無関心という温床に於いて育つ事を忘れてはならない。



下村 湖人

県大の我が部を見ていても時々無気力・無関心を感じる事もあった。我々日本

人は多数者の無気力・無関心というイジメの温床に対し、根本的な教育努力をして来ただろうか？

戦後70年に渡って教育に一番欠けていたのは「人としての行動規範」であるところの「徳育」である。国籍、宗教を問わず人間を人間たらしめるのは、人としての行動規範である徳育である。

日本に伝統的にあった「人としての道」を海外に発信したのは新渡戸稲造の「武士道」だが、その根底に流れている一つが「儒学」の精神だ。昔は幼い時から五常（仁・義・礼・智・信）の徳を養い、五倫の道（父子の親・君臣の義・長幼の序・夫婦の別・朋友の信）を身につけ、人格を磨くことが尊ばれた。こうした教育は「素読」や「物語を読むこと」を通して子供の情緒に沁み込むよう教えられていた。物語の中で武勇と正義に胸躍らせつつも、敗者の胸の痛みや哀しみにも思いを致した。人間の心の複雑な動きを感じ取る体験は子供の心と人格を育む。

注) 武士道

新渡戸稲造が1900年にアメリカ合衆国で「Bushido: The Soul of Japan」を刊行した。本書はセオドア・ルーズベルト、ジョン・F・ケネディ大統領など政治家のほか、ボーイスカウト創立者のロバート・ベーデン=パウエルなど、多くの海外の読者を得て、明治41年（1908年）に『武士道』として桜井彦一郎が日本語訳を出版した。



現代はこの様な教育を失った結果、社会は「真心」や「思いやり」を失い、甚しきは感情の赴くまま抑制が効かず、親殺し、子殺しをする獣の如き者をも生み出している。

戦後、武を尊ぶ精神はGHQにより国家権力を鼓舞するものとして否定され、長らく尚武（しょうぶ 武道、軍事などを大切と考えること）の気風が途絶えていた。それ故か、自衛隊も警察も国家権力の悪と見なされ、「正義の力」の行使が出来ず萎縮してしまった。学校でも、何かの揉め事を起こせば喧嘩両成敗の名の下に、正義が葬り去られた。道義や弱き者を守る為に闘ってもマスコミに非難されるだけなら、教師も生徒も見て見ぬ振りをするのが得策だとの悪習が生まれた。中学生にもなれば腕力もついてくる。教育の場であれ「力」を制する為には同等以上の力が必要であり、「力」を使わず抑止するには、強い気迫や胆力が必要である。それなくして、いじめられている子供を守ることなど出来はしない！！

尊厳が暴力によって踏みにじられようとする時は「抗（あがな）う力」と「勇氣」が必要である。「力」で敗れたとしても尊厳を奪われぬ意志を示すことが、人の人たる所以（ゆえん）だ！！相手の「力」を暴力にせぬ為には、「徳を高め」・「胆力」・「気力」を磨いておかねばならない。幼き頃から「人としての行動規範」を確立する教育が必要なのだ。それが「多数派の無気力」や「利己的無関心」に付ける唯一の薬となる。

下村湖人先生の「心窓去来（1951年に出版された随筆集）」で曰く、社会生活に於いて「悪の力」が本来「善より強いのではない」。悪人の無遠慮な団結力や行動が「善人の利己的無関心さ」や「孤高を装った卑怯さ」に打ち勝つのである……と。正に至言。こうした「深い人間観」と「教育哲学」が現場の教育者から失われた事も「いじめ」の遠因であろう。教育の成果は「偏差値」や「有名高校や大学への進路」という「物差し」だけで見るのではなく、「人格の成長」や「見識」を重視するべきである。子供の評価は親や教師の「人間観の深淺」によって決定される。真摯に学ぶべきは私達大人なのである。教育界を例にとったが、一般社会でも全く同じ精神衰弱による歪んだ無関心、無気力の世界が展開されているのである。

戦後の日本では嘘がまかり通り、嘘を一番良く覚えた者が頭の良い人であり、成績優秀になり、有名大学に入り、大学教授・政治家・官僚・新聞社・出版社・教師・会社幹部など指導的立場に立つようになる。そして我が国だけの特異現象＝「頭が良くて、成績優秀な者ほど愚か」というパラドックスから抜け出せないでいる（長浜浩明氏参照）。

これらの人物達は往々にして、恰も人道主義者や愛国主義者であるかの如く

装う偽善者の群となって、国の安全や国益を守る為の闘いを恐れる無気力な己の「卑怯な心」を隠し、善人振った毒説をたれ流し、国民を欺き、祖国という基本概念を忘却の方向に向けようと試みるのである。人は心の中の戦いを忘却しがちで、これらの悪を払拭するには、やはり深い人間観、人間力を養う教育の重要性を痛感させられる昨今である。

参考文献 パッカーズ寺子屋（木村貴志）

平成28年2月9日

志雲会代表 有馬 正能